特250
752

小澤武二著

句集

散文時代

始

特250
752

散文時代

小澤武二著

昭

和

十

年

つぎつぎ何かしら咲いて日のささぬ庭が秋になります

石垣がぬれて朝になつてゐるつくつくばうし

菖城子君送別

銀杏の葉の青暗さ君が滿洲へ行くとて來られる

街のレコードがもう秋で雨があがりさうな夕べで

また君も遠くへ、プラットホームが秋口の宵で

窓には乾いた葉とくものすと空がすこし

君とお茶をのんだりして銀座の夏の夜になつたばかり

私の窓だけ起きてゐて星は初夏の星で

池が光つてゐる風のバスが止つては出てゆく

明治神宮

樟の若葉が照つて徑は人が往つたつきり

晴れると夏らしい雲が、ショウウインドウを拭いてる

抱へてゐる花が葉がにほふ闇を戻つてくる

春になると水がはられてその甕に息づいてゐる魚

藤はやや半開の、人の集らない説教

私の感傷が雨になつて濠に落ちてゐる見てゐる

並木はまだ芽ぶかない雨がペーブメントを搏つてゐる

私の生活が切つて放たれたやうに夜行列車に乗つて走つてゐる

櫻が暮れるとうら寒い風が立つてゐた

長女病む

もう永くは生きまい後姿が讀み耽つてゐるのだ

動きながらついてゐる齒も、四十になつた私です

芽ぶきさうでこの頃どうも曇りがちで

チンドン屋と犬とりと街は春めいて來てはゐる

百花園

枯れ枯れの中連翹に日のあるひとときぬ

罷業の人達道に出て早春の夕月のある空

それも遠くへ行くと次々に別れに、春にはなつてゐる

もう火のいらないやうになつた書齋に宵からゐるので

春空が濁つてときたまビラちらす飛行機が來たりする

春夜の闇から私を嗅ぎ出した犬で私を知つてゐる

熱海にて、八句

フロントグラスへ櫻の白さがほんのりと夜の道

廊下へ跫音が、花の咲いてゐるらしい外が白んでくる

明ければ山の端に櫻が少し、みんな咲ききつてゐる

鐵瓶がうしろ見せてゐる宿の朝がもう春で

いたどりの芽が崖にあらはであつて四月で

思出の墜道を通りだんだんと沖が明るくなる

櫻、見下ろせば藪の中人が仕事してゐる

崖を崩すのは鮮人で櫻はもう散るばかりで

花びらが空を流れて道は岬にかかつてくる

眞鶴にて、七句

頼朝の隱れた窟とか、水を滴らし晴れてゐる

シヤベルでぢやかぢやか抄はれるのが鰯でみんな反つた形で

舟をつくる安らかな音を立てて人らがここにゐた

海藻の群落に潮が流れてゐるだけで

虚貝から足が出て這つて春の磯邊です

岩陰日がさし込んでゐて雲丹が生きて動いて

汽車には大分間がある山の櫻を眺めてゐる

闇へビルディングが連つて枯れた街路樹を照らす灯で

寒い樹を廻り鎖が太く暮れてゐる

斜面へ洞を一つ据ゑて枯れてゐる

朝の人通りは日向の方を、松の内も終りで

有栖川記念公園

島に鶴を置いて、冬日うらうら晴れてゐる

煤けた櫻の大木が驛に、雀の宮といふ

馬市の馬が驛に、正月の陽が春くところ

櫟枯葉の夕陽の、上り列車に乘つてゐる

畑にどんどを立てたまま暮れて人もゐない

氏家、砂盪居

寒さ目ざめて小作に諭すのが聞こえてくる

轉居

雪の中引越すことにして皆が手袋をつけてゐる

寒い襖をあけたりしめたり子らに夜が來てゐる

私の生活の殼があとからあとから運ばれてくる

朝から緣にさす日をまづ私が軀へあてる

少し日のさす家へ移つてもう日向へ來てゐる吾子達

柳が芽ぐんで子供に風船を配る仕事です

自動車の事故へ人だかりの春もまだ寒いタベで

昭和九年

夏から咲きつづく花の花壇が明るくて十一月

保元寺

石佛に菊がなだれて波哉さんが居られさうな日で

新潟に磊々子氏を訪ふ、五句

新潟といふところは砂ばかりの君の庭も秋で

秋風の砂丘に人が、近づけば行つてしまふ

砂丘の草も老いて佐渡が長々とある沖

砂丘は秋風の犬つれて少女が遠くなつてゆく

錢湯の藤棚を垂れる實も秋で、旅で

長岡

乘つて來た汽車が出てしまふ秋の朝に立つてゐる

雁木のある街並に朝はもう秋で案内される

包をほどけばざくろで、赤い實をこぼすざくろで

無花果はぜるにまかせて人の住むには住んでる家で

草原に銅像があるので秋が晴れてゐる

ビルディングが脊を向けて秋の日がたけなはな

ビルディングの間に明地が、草は老いてゐる

大工は煙草休みの風に散つて來る木の葉

銀杏を笊に干して日がもう短くなつてゐる

秋風、魚紋のおのづからなる移りやうも

もう風は寒くて道べの雜草の實の垂れたの落ちたの

敗荷の亂れやうも空は晴れきつてゐる

美術館のあたり日ざしも秋でちらほら人來る

放送局があつて青葉が老いてゆく丘です

すべてが私の感傷で空の蜻蛉が晴れてゐる

ざくろ喰べてゐる子に、軀を長くしてゐる私で

花が咲いて久しく咲いてゐて春が行くのです

裸で裸灯で鐵を削つてゐるのです

橋がタづくともう出て涼んでゐる

街路樹に暑い夕日のラッシュアワーになりゆく

荒川吟行

青葉の風のへなへな橋を渡れといふのです

青草の風の遠くから君とは知つてゐた

薔薇、水門へ舟の出入りする

陽がおちてからの並木が高くて涼しい

長谷川義起氏を訪ふ

牡丹は葉ばかりの庭のアトリエから出て來られる

越ヶ谷

橋から藻を刈るのが見えて秋も近い暑さで

亡妻、せつ女七回忌

もう墓石も建てねば、蟬しぐれに立つてゐる

横須賀

軍艦のゐる沖から風が、子の帽子のリボン

庭へ梅を干しその匂ひの日盛りともなれば

亡母十三回忌

つめたい水を手桶に、炎天の墓山を登ります

佛壇の花も机の花も朝がもう秋です

裸木君追憶

窓から夏夜の星が、君が庭から聲かける頃で

日車に陽の、晝寢頃の君の机の菓子鉢

賣る者の嘘ではなかつた、蔓が葉が出てきた

鍋をかけたまま行かれて日が永いことで

橋から海の見えて街の櫻がちらほら咲いた

挿した花が咲いてしまつてしみじみ春の夜

木の芽、私の家も見えよう丘を案内してゐる

芽ぶく頃の闇がなんとなく私を歩かせてゐるのです

近くのはまだ咲かない櫻が活けてあるのだつた

古河吟行四句

此汽車に乘つたのは是だけで、櫻の咲いてゐる野の面

茶の水の味も東京を遠く來て花曇りの畫すぎ

沼のふちは楊が萠えて鐵橋が少し見えるところ

春からは沼となるといふ沼になつて芽ぶいてゐる

落葉の朽ちきれない土で多が毎日晴れてゐる

鳥の脛のやうに枯れた枝からもう芽をほぐしてくる

池の氷の融けるには融けて子の病癒えるでもない

窓の空を狭くする家が建つて春になつたその空

寒夜を挿した花のその記憶から逃れられないので

薔薇の芽が赤くもう二月も逝きます

層雲社

ここで仕事をするのも二十年で今年も梅が咲きました

きまつて芽を出すものが、早春の雨が來てからの庭土

金魚の生きてゐる氷へ陽がさして朝は

獸の檻に遠く人が憩んでゐるので芽ぶきさうで
櫻の蕾も固い遠足の列が銅像のほとり
野はまだ枯れたままで私の思想のちぐはぐな浮雲

其春氏を送る

滿洲へ立つ寒い顔を動き出した窓から見せて
灯が映畫館を空へ浮かしてゐて寒い夜で

ビルディングの横顔へ山並の夕燒けてゐる線
ビルディングがともりはじめた空はまだ青いままで
濠端の枯柳も暮れきつて寒い人影がとぼる
寒い風が地下鐵工事の停つてゐる機械
氣球の遠いの近いの晴れて葉のない樹で

凍て空へぢかに街並がのびてゐるので
裸木には枝が少こし青空は凍ててゐる
公園から驛へ坂の、雪がまだ殘つてゐる

層雲社

犬が小屋にねるので、寒く暮れてゐる庭
月へ星が隱れるのを地の一角から見てゐる

やがて夜があける火鉢に炭を足してゐる
壺の花がいつも同じでまた夜が更けてゐる
へうけた鳴り物が青ざめた街を流れて行くのです
家を建てて垣をしてそれから、人が住んで、多
落葉、風の氾濫に立ちつくしてゐる

大きな建物が建つて旗を出して街も空も多

ホテルの非常梯子が日向で街路樹が落葉

昭和八年

銀杏は葉がない層雲社で訪ねられてゐる

冬の日の建築が進んでゆくまいあさ

落葉して伽藍のうしろがあらはに十二月

濱松、青蓋書屋

明けてゆく花は山茶花で君等ももう旅の仕度で

大平峠越、七句

ここから路が、峠へずつと晴れてゐる

つれなくもといふやうに陽のさす山を前にしてゐる

龍膽の花を手に手に峠からまた車に乘る

小鳥燒く匂ひも、雪のある山が遠く晴れてゐる

童らをり徑は紅葉明りの徑

けふ泊る町が見えて紅葉の一きは明るい山の間

山路ゆけば秋、龍膽は紫の空は眞青の

時又、飯田の同人に送られて

舟に乘るも送るもたぎち流れる岸べに佇み

天龍川下り、六句

芭蕉が渡つて行きさうな棧が朽ちて蔦が紅葉して

誰もぬれてしまつて水のたぎる行手は山が紅葉

鵜群れて川波のしぶく石のうへ

ごつごつ底に觸れる巖を感じて川舟に座つて

橋を高く仰いで瀬の早さへ突き入る舟に

リベラリストであることが、蔓物茂りに茂り

雲間の光も秋で、氣球が低い街で

波戸居

雞頭赤く地に据ゑたままの釣鐘のそば

柵から公園が、すつかり枯れてゐる

納骨堂を圍んでまだ葉のある樹で

足場へ弦月が寒い宵になつてゐる

外で遊びたい子を呼んで冬日の少しさす窓

一どに葉が落ちてしまつて乾ききつた空で

落葉、滿洲へ兵隊を出す一家で撮影してゐる

外で寒い音が、枇杷の花に陽がなくなつた

ルンペン子を連れて畫のにほふ蓮の葉

裸木のことを書いてゐて蚊のせせる宵も秋ぐち

みんな年をとつた、蜩の鳴く追悼會で

蔓が絡らみあつてる垣一重の隣の生活

慾目には癒つて來る兒で帽をかぶつて醫者へ出てゆく

雁來紅が明るくする狹い庭はある

人を送つて出て驛の外は夏の雨がふとい

緑石氏を悼む

秋になると梨を、否秋を送つてくれる君だつた

高く建つて空地がなくなつた雲が夕燒けてゐる

增上寺景光殿、裸木追悼會

西日の蓮池が見えて大樹のひま

熊は私におじぎをしてゐるのであつた

病んで寢て幾夜の、額の畫はいつも月が出てゐる

机に子らの玩具が載つてゐるのが見えて病んでゐる

こぼれて秋に生えてしまつた芽でのびてゆく

鶴見花月園、三句

海が白つちやけた展望の、煙は汽船の煙

松が五六本、海には白い船が浮いてゐるだけ

猿の生活の外を私が通つてゆく、秋

どの木も葉が乾いて、疲れた目をやる秋の空間

秋夜の活字の密集からことこと選まれてゆく活字

水も魚も秋になつた、影

もう秋の、毎日幾度も出はいりする門

淺く魚が見えて風は秋風

ここにどうして錢が夜更けてゐる壘で

野球もやめてしまつた綠が暮れたので

女學生とあとさきにもう櫻は葉になつた道

悔に似たものが草の葉の蝕ばんだの

旅の荷をもつた西洋人に梅が咲いてゐる驛で

けふは氣球が一つ上つて冬の貧しい街で

正月になつた子達前にしてゐるのだつた

もう年のかはつた空が暗くて寢ようとする

忘れてたものも芽を出してすつかり春になつてゐる庭

子供が折つてきて呉れた櫻で挿しておく

それから子をねかす聲がして夜が凍てだした

子と遊ぶ暇の冬の日もう暮れる

枯らすものを枯らすともう土から芽をふいた

紅珠玉氏追悼會

扇はたはたとみんな親しい顔の、君はゐない

春はまだ遠い空の氣球の文字が裏返へしで

消し忘れた灯が門に、雪は大分つもつた

番人の居ない踏切で枯れ切つてゐる

ステップを揃へて凍てた石段を降りてくる

鐵を積んだトラックが、もう芽ぐむらしい街路樹

うちの子はどうしてから弱い、毎日寒ンの寒さが續く

音樂堂の雪も霽れて遊覽バスから降りてくる

なかなかあがつて來ないエレベーターの寒い空間です

長女病む

診察室から見えてもう氷らなくなつた池

せい女追悼、二句

その頃は落葉してゐて笑つて別れた

今にも寒い姿で來さうな君の追悼會です

寒夜の壘にあつて數を敎へる玩具で

彼女の死は必然で、風が枝から離れない

私はフリーランサアで冬夜の會合に出てゐる

鳳車居、千里子孃葬儀

門まで霜がとける告別式へちらほら人くる

狐の皮がショウウインドウの中で、みぞれてゐる

鼠をよける餅を前にして寒夜の筆をもつ仕事

へたへたと梅が開いてもう寒くない朝だ

雪をまろげ雪をなげ雪が暮れくる

生活に合はない時計のオルゴールが鳴つてゐる春夜

鎌倉大聖閣

そこら椿が落ちたりしてゐて會に來た人の下駄

されば とて四角いものは四角い夜の身のまはり

まだ時計はたくさん打つてゐる、私の夜である

わたしはサイドタイトルを誤つた映畫で、まどろんでゐる

結局は得たのではなかつた乏しい火に手を焙つてゐる

人間の死がハガキ一枚で、冬夜のそれから

チグハグな感情の時計の歌をとめるでもない

何も悔ゆるばかりで、春が象(かたち)をあらはしてくる

さらりと感情を轉向して、星夜へ出てはみた

寒夜の幕外でエピローグが長い道化役者であつて

昭和七年

もう葉を落とすものもない庭へわづか日が射す時

樹は冬の眠りへいりかけてゐる晴れてゐる

落葉、私はおまへの心を縛つてるのではないか

落葉、私には棄てきれぬものがまだある

私は賴られるだけで、冬が驀進してくる

エレベーターの寒い扉にしめ込まれた

お濠が冬になる風を見せてゐる

これから先へは行けない落葉してゐる

考へつかない、炭が火になつてしまつた

媚びて生きるのは知つてゐる木の實燒いてる

落葉、手から口の生活をつづけてはゐる

果してさういふ世が來るか、落葉してゐる

ステーションとビルディングとビルディングと夕焼けた

火鉢に火をいれると夜が冬になつた

遠いラヂオがソプラノで机では私が考へてゐる

用もないのに灯したきりで私のゐなかつた机で

赤い烏瓜を買つて活けて呉れてあるのです

悲壯な決心をして蔦の晴れてゐる冬空

貼つても破かれる障子の中で毎夜もの書く

過去へ引ずるやうな街の音樂から脱走してくる

雨が見える明るさに明けて秋の葉

もみぢするまへの葉をつけた樹で、バスを待てば

氣球が風に傾いて青い空がどこまでも青い

何と若葉の匂ふ道のボーイスカウト達

がつちり組上つた鐵骨が夏になる街です

乳屋もまだ來ない朝の紫陽花に出てゐる

心で何か闘つてゐる私が草を見てゐる

三日月が月であること教へてゐて涼しい

蓮池の雨、人は雨を見てゐる

よい本を得て戻る月が出てゐる

藤棚の下は日向となつた卓に何もない

三寶寺池

鳩の巣へ雨の暮れようとする水

闇へ歩き出して花が匂つてゐる

どこかページへ虫を挾んで閉ぢてしまつた

波故居

赤い桃の見える桃の木を庭にしてあけくれ

原稿紙書いてない蟲が歩いてゐる

附

錄

職業
せい女とINKSTAND
いはなし
外祖父
迂遠な紹介狀
屋陋漫談
花と私
養蟲の親子

職業

少し春めいた朝だつた。入口に訪ふ人があるので、出てみると、それは警官であつた。戸口調査簿を捧げるやうにもつてゐるので、すぐに、調査にやつて來たのだとは知れたけれども、いつも來る平(ひら)の巡査ではなくて、部長とかいふのであらう腕に白い線をつけてゐる上級の警官であつた。型の如くあつさりと訊問して、さて私を此家の主個であることを確めた上に『職業は』と問うた。私が『雜誌社に出てゐます』といふと『何をしてゐますか』と問ふ。『何といふこともありませんが』と言葉を濁すと、『印刷ですか』と云ふ。『印刷はうちの社ではやつてゐません、他の印刷所にやらしてゐます』と答へると、その警官は不審さうに小首を傾けるのである。そして、帳簿を指して、『これには『出版職工』と書入れてあるのですがね』と。そして、『出版職工といふのはどうもをかしい名稱だと思ひましたが』と云ふのだつた。『それでは、「編輯」とでもしておいて下さい』といふと、その通り訂正してくれて、叮嚀に挨拶して歸つていつた。

それに就て思ひ當ることは、もう五年程以前に、大阪から濱口彌十郎君が訪ねてくれて、どうしても訪ね當らないので、交番(ナントそれは、家數にして五六軒を隔てた處にあり、且つ同番地内の)で巡査に尋ねたところ、さんざに戸口調査簿を繰つた末に、『小澤といふ職工の家ならある』といつて教へてくれたといふ。その時、彌十郎君に、『あなたらしい届方をしたもんですね』とすつかり感心されてしまつて、其時は妙にテレてしまつたのであつたが、それが、今日はじめて訂正されたといふ譯なのである。

そんなものは私として、どうでも構はないことであるが、いつそ『出版職工』といふやうな妙なものよりも、『俳句職工』と書いてゐたら面白いのだが、と思つたことである。

(昭和九年三月)

せい女とINKSTAND

それは一昨年の夏が去つて、大分涼しくなつた頃の事だつた。例の小泉せい女が、カナブンブン（甲蟲の一種）のやうに、また博徒のなぐり込みのやうに、層雲社の編輯室を騒がしに來たのである。

『妾ね、此夏は、お友達と一緒に避暑に行つてたの、とてもすてきだつたわ。兵庫縣の××といふ海岸よ。お友達つてのは、Iさんて人、そりやとてもシャンよ。その人に、貴方のことすつかり話しといたわ、頭にこんな大きな不毛地帶があるつてことや、とても氣のいゝ面白い人だつてことや、とても惡口屋さんだつてことやをね、そしたらIさんすつかり喜んぢやつて、歸る時にこんなお土産よこしたわ、あなたによ、これとてもすてきでしよ』

せい女は、乾く唇をちよい〳〵舐めずりながら、とてもとてもを連發して例の通りベラ〳〵と捲くし立てゝ、風呂敷包の中から、小さなボール箱を取出して机の上に置いた。

『なんだいこりや、女生徒に遣るのとまちがへたんぢやないかい』

私は思はず口を辷べらしたものである。それといふのは、其箱の蓋をとつて見たら、金屬製のインクスタンドが現はれたのだが、それがバレツト型をして、その表面には薔薇の花の浮出模様がケバケバしく彩色で出てゐて、どうしても十六七の少女が使ふ物とより思へなかつたから――。

『何云つてんのよ、それ私が見立てゝ買つたんぢやないの！　茲へいつ來て見ても、インクスタンドがあつたためしがないから、丁度いゝと思つてIさんに買はしたのよ』

『ばかだな、こんなもの、此處で使へるかい、をかしくてさ、使ふ人を見てもつてくるもんだよ』

『さういへば、さうかもしれないわ、けど、せつかく人が呉れたんぢやないの、いらなけりや返しなさいよ、Iさんに返しちまふから』

『ばか云ひたまへ、折角、人樣が下さつたものが無下に返せるかつてんだよ、なにも今使はなくつたつていゝぢやないか、有難く頂戴して置くよ、人の好意は無に出來ないからね』

『だつて、使はないことこそ人樣の好意を無にするつてもんでしよ、無いからもつて來て上げ

たんぢやないの』

『インクスタンドなんて無くつたつて、インキ瓶もありや、萬年筆もあるし、不自由なんかしてやしないさ』

『だつて机の上が淋しいぢやないの』

『机の上は御覽の通り書き物や手紙で一杯だよ、こんな物おくとこさへありやしないや』

『風流心の無い人間なんてしようがないのね』

『ばかいつてら、こんなもの飾つておいたらどこが風流なんだい』

賣言葉に買言葉で、一渡り例の通り悪口雜言のやりとりがあつて、せい女はもう例によつてカンカンに怒つてしまひ、どうしてもそのインクスタンドを返して貰ふと云ふ、此方もいこぢになつて、せい女に直接貰つたものなら返しもしようが、Iさんからの贈物をことづかつて來たと云ふからには、Iさんから返して呉れといふ言葉があるまでは返さない、まあ照會しておきたまへ、といふので、結局そのまゝ抽斗の中へ藏ふことになつてしまつた。

それはそれとしてその日、せい女は、旅中の見聞やら何やらを、速記者泣かせの代議士の演說

のやうに、フルスピードでしやべつてゐた。網干に病魚眠氏を訪ねたとか、其處の不徹庵を訪ねてすて女の墓に詣つたとか、Iさんとどんな話をしたとか、大阪では誰々を訪ねたとか、京都では、綾彦氏を訪ねて京極でソーダ水を御馳走になつたが、笑つた拍子にみんな顏に浴びてしまつたとか等等、縷々として盡きないので、いさゝか辟易したが、いゝ加減に相槌を打つてゐるうちにしやべりくたびれたとみえて歸つて行つた。歸り際に

『とにかく、Iさんにお禮狀を出して頂戴、そのうちIさんの寫眞もつて來て見せるわ、Iさんとてもすてきなんだから』

といふ捨ぜりふで――。

其後私はとんと其事を忘れてしまつてゐたが、仲秋の頃の或日、ふと抽斗の奥からそのインクスタンドを見つけたのでIさんに禮狀を出してないことを思ひ出した。ところがIさんの住所といふのを、其時フン〳〵とうかつに聞いてゐたので忘れてしまつてゐた。まゝよ、好い加減でも届くだらう、小都會の事だから、『神田にてお伯母樣』といふ程でもあるまいと思つて、××市×女學校内I先生としてハガキを出した。何と書いたか忘れたが――『いづれせい女の創作でと

んだ人物にでつち上げられてゐること〻思ふが』と自分のことをそんな風に書いて、とにかくお土産をありがたく落掌したと書いたやうに思ふ。するとまた忘れた時分にIさんからハガキが來て、『御同様に自分もせい女の創作の被害者の一人であると思ふ、とにかく今後よろしく』といふ意味が書いてあつた。そしてまた忘れた時分に、例のせい女が襲來して來たのである。

『あら、まだあのインクスタンド使つてゐないのね』

『さうさ、始めつから使ふとは云はなかつたぢやないか』

『だつてせつかく……。要らないなら返してよ、人をばかにしてるわ』

『おつとどつこい、さうは行かないよ、もう返せないよ』

『何故?』

『だつて、僕が禮狀を出して、先方からも挨拶があつたんだからね、今更返せるかい』

『さう、ぢやしかたがない、返さないでもいいから使ひなさいよ、せつかく……』

『わかつたよ、使ふよ、そのうちにね……』

其後、幾度か、せい女はやつて來たが、インクスタンドの事は話題にのぼらないでしまつた、せ

い女も忘れたのかもしれないし、せい女の話題はなか〻多いので、それにまで行かなかつたのであらう。しかし、Iさんのことに就ては、最近結婚したが、とても面倒なことになつて、Iさんは現在では『手鍋提げても』を地で行つて貧しい陋巷生活に甘んじてゐるといふことを云つてゐた。

其インクスタンドは貰つてから三度目の夏が來た今でも私の机の上には載つてゐない。そして例のせい女は、去年の十二月に朽葉が落ちるやうに死んでいつてしまつたのだ。

近頃、播州網干の池田龍眠氏が死なれたに就て、同氏と面識があつた唯一人の層雲同人として、せい女のことがちよい〻活字になるので、私はまたあのインクスタンドのことを想ひ起すことが度々ある。——その少女向のデザインのことを考へるとどうしても苦笑を禁じ得ないのだが、それと共に『あら、まだインクスタンドを使はないのね』と肩のこけた脊の高いせい女がのつそりと、しかも慌しく入つて來て、開口一番怒號するやうな氣がするのである。

（昭和八年七月）

いはなし

或朝、丹波福知山の梭二君から鐵道便で小箱が届いた。蓋をあけてみると、青い小さい木の實がぎつしりつまつて、一種の芳香を發散してゐた。見たところ、薔薇の苔をちぎつたような形をしてゐる。何だかえたいが知れない。小さい枝に葉とともに實のついたのもある。ぐみのやうな葉である。家人も知らない。社へ持つて行つたが、山育ちの永信君も知らないといふ。丁度例會の日だつたので席上に持出して諸君に見せたのだが、誰一人知つてゐるものもない。一言居士杜子君さへ一言なしといふ始末。すると魔神明君が、ムシヤ〳〵やつてうまい〳〵と云つた。「あつ、やつたのですか、うまいんですか」と誰かが云ふと、「うまいです、だが、僕は菓子をやつたんです」と木に竹を接いだやうな話。それがまじめなのでどつと一座が爆笑した。

それから梭二君に質問狀を出した。すると梭二君してやつたりとばかり低い鼻(?)を蠢めかしてでも書いたやうに左の通り回答して來た。

「あれを知らないとはずいぶん都會者だなア。

いはなし（岩梨、岩棠子）植物。石南科の常綠小灌木、高山に簇生す。莖は地に臥、高さ僅か二三寸、葉は互生し、楕圓形にして茶褐色の粗毛を生ず、春日梢上に淡紅白色の筒狀花を簇生す、果實は大豆の如くして球形をなし味酸甘なり。」

多分、歳時記から拔萃したのであらうこの文章を讀む頃には、その岩梨は梅雨期のためか黴が生じて、强烈なアルコホル性の臭氣を發散し始めたものである。そこで

篠山の山家の猿に非ずしてなど岩梨を喰うべらるべき

と、梭二君へ云ひ送つたのである。常からのいたづら者梭二君、社の三猿に因んで、「いはなし」を送つたのならまづ上出來であつたのだが——。

（昭和七年七月）

註　社の三猿、井泉水先生は甲申歳生、武二は丙申歳生、永信君は戊申歳生。依て層雲社の三猿といふ、昭和七年は壬申歳に當る。

外祖父

机に倚つてゐると、折ふし外祖父を憶ひ出す。なんでもその亡くなつたのが、私の五歳の頃だつたから淡い記憶にすぎないが、外祖父はいつも南向の部屋に机を据ゑて端然とそれに向つて坐つてゐた。そして必ず筆を手にしてゐたやうに思ふ。私はその傍に坐つてゐて、畫をかいて貰つたことも憶えてゐる。外祖父は滋野姓で、八郎左衛門氏堯といふ長い名のりを維新後に俊三と改めた武士の端くれだつたが、讀書を好み、書を好くして、俳諧をも嗜んでゐたといふことである。外祖父には大勢子供があつたが誰一人、俳句などに關心をもたなかつた。その孫に生れた私が斯く俳句に携はるといふのも、遺傳の法則に適つてゐるのかもしれないのである。

その外祖父の配偶即ち外祖母の弟には、俳諧の道に入り又戯作をもやつてゐた小泉某といふ人があるが、どういふ作があるのか解らない。又、外祖母(名うた)は始め、師岡正胤(號節齋)に嫁いで一男一女があつた。正胤は醫家で且つ國文學者であつたが、勤王倒幕の事に奔走した爲め、

江戸に居られず、外祖母は離別されて生家に歸り、後年滋野家に嫁いだのである。節齋は文久三年三月、京都等持院なる足利尊氏の木像の首を刎ねて三條磧に梟した事に連座して捕へられ、信州上田藩に幽囚された。其間に『みみず日記』等の著がある。王政復古の後には朝に仕へた。その節齋の娘(後妻の)の一人が幸德秋水の妻であつたといふのは皮肉な因緣である。因に現在の師岡家は神田明神下にあつて、皮膚病藥　一二三(ひふみ)の本舗であり、當主は醫學博士で開業してゐる。又、今は教育家であり、嘗ては文壇人であつた小林愛雄氏も節齋の血をひいてゐる筈である。なほ、外祖母の長子は師岡姓であるが、家は繼がなかつたのである。

(昭和七年二月)

迂遠な紹介狀

友人、白海白空氏が訪れて來た。水色の夏服を着て、眞白いワイシャツを覗かせてゐる。ネクタイなんかしてゐない。彼氏はいふ。「もつと鼠色のシャツを來てくるんだつた。」だが彼氏はさう無精らしくもない、髯は綺麗に剃つてゐる、或は始めから生えてゐないのかもしれない。なかなかスマアトなスタイルではある。そして彼氏はいたつて寡默である。だが、こちらから叩けば開くのである。彼氏は俳句の話をする。俳句の話ばかりだといつてよい。彼氏は迂遠な詩の話なんかしない。そして彼氏は疲れるを知らない。

彼氏は舊い作を示して、自身の過去を諄々と物語るのである。

海風のポケットにボタンがあつた
蟬だまつてゐる死んでゐる
凪いだ海へ日暮の電柱が並んでゐる

帆船いつまでも見えてゐて暮れた

彼氏は時代といふものをよく知つてゐる。決して迎合してゐるのではない。彼氏は常に苦悶して來た。

枯れた林から流れてゐる
庭に冬の木青くあつた
道が惡くて來れば麥の芽

彼氏は象牙の塔でなしに、四角な部屋に籠つてゐたといふ。

醉うて歸つてきたのは自分の影だつた
茶椀を割りましたとあやまられてゐる
淋しくて笑へば子にそつぽむかれた

壞れた椅子で棚をこしらへてある一鉢の花

けれども、彼氏は、其部屋を出た、何處へ行つたらう。彼氏は、白い海に出た。そこには白い空があつた。彼氏はそこで大きい思想を把握した。

夕の海の底で波が細かく折れてる
海が家にしみ込みさうな畫である
骨のやうなベンチへ腰かけて朝露
たしかに空と海がふれ合つてゐる一線

彼氏は新心理主義といひ、新感覺の發見といふ。けれども私は知らない。諸君が其思想に直接觸れられようとならば、彼氏に會つて戴きたい。彼氏は喜んで、どんな山間僻地へでも赴くことを辭せないであらう。實は彼氏は、内田創平氏著はすところの『白い海白い空』といふ句集なのであるから——。

（昭和六年九月）

屋陋漫談

私の祖父は、常に「腹八分に食うておく」といふことを保健のモットーにしてゐて、七十二歳まで生きた。また、父も若い時は虚弱でありながら隨分不攝生な生活をしてゐたが、中年からは矢張り腹八分主義をとつて、七十三歳まで生きた。祖父といひ父と云ひ、さうしたことに依つて長壽を保つことは出來たが、その健康第一主義なるものが、既に生活戰線からの退嬰を意味することに就ては寒心せざるを得ないのである。祖父の事はよく解らないが、父に就て見ると、父は若い頃から新事業に一身を傾注した、そして終には家産を喪つた位だつたが、其間は力一杯な生活だつたから、健康を顧ることさへなかつたらしい。然し運が悪くて、事業は徒に他を肥したにすぎなかつたので、中年からはそれに興味を失ひ、同時に健康に留意しだした。即ち腹八分主義となつたのである。近頃、私自身が識らず識らずの間に、腹八分主義に轉向し掛けて來たことを見出して自ら愕然とするのである。

×

私は所謂「痔もち」である。それはかなり早い頃から萠してはゐたが、大正の大震災を劃期として悪化した。毎年初冬から孟春の候に至るまで一年の三分の一も出血に見舞はれたりする。で、私はよく其を他に訴へると見えて、知己の間に知られてしまつた。或人は醫療を、或人は電療を、或人は藥草を敎へて呉れる。が、自分の懈怠からそれらの好意に叛くことが屢である、そして依然として惱んでゐるのである。斯病の先輩？　として芭蕉翁がある。翁の症狀は今知るに由もないが、翁もやはり、人からいろ〳〵と敎へられつつ、生涯その治療を怠つてゐたのではないであらうか。蓋し、それは斯病患者の通有性らしいのであるから。

（昭和六年七月）

花と私

元來、私は花卉が好きなのです。殊に、苗といふものに、興味を持つてゐます。苗賣といふのは、初夏の景物として、よいものですが――私は、夏の夜、緣日の苗賣の前に長いこと踞つて苗を見てゐたりします。さて、苗を買つても植ゑるところは無し、よし植ゑてみたところで、花を見るまでの丹誠が覺束ないのですが、此の苗に愛着をもつ點は人一倍だと思はれます。

雁來紅の苗の少し紅いのを呉れた

私の古い作にこんなのがあります。その苗を貰つたのが、ほんとうに嬉しかつたのでせう。

私は物事をよく花に結びつけて記憶してゐます。ですから、凶い記憶がその花に對すると、まざまざ喚び出されることが多いのです。例へば、芍藥は、私の直ぐ上の姉が死んだ日、床に挿してあつたのをはつきり憶ひ出します。私はそれで、其後それを挿すことが嫌になりました。カンナが好きなので、庭に植ゑようと思ひながら、つい植ゑもしませんでしたところ、偶然其の大き

な株を手に入れて庭に植ゑた年に父を喪ひました。今年もカンナの時季が來て、それを見かける毎にいやな思ひがします。烏瓜のあの幽玄めいた花の感じも好きでしたが、妻を喪つた時の通夜の朝の、あの花の姿こそ、忌はしい記憶に殘りました。

烏瓜の花曇晴れようとしない

といふ句を作つたのは其時です。其他チウリツプや、タバコニヤや、秋海棠や、月見草や、各々に凶い記憶がつきまとつてゐるのです。

かうしたセンチメンタリズムも所謂俳人の通有性なのであるかも知れません。

（昭和六年七月）

童話　簑蟲の親子

或るお邸の庭の、梅の古木に、親子の簑蟲が住んで居ました。父親の簑蟲は、昔で云つたら松尾芭蕉といふ人のやうな俳諧師でした。花が美しいの、月が綺麗だのといつて、俳句――（昔で云へば發句）といふやうなものを作つて、ぶら〳〵と暮してゐました。

或る時、父親の簑蟲は行脚（旅をしてあるく事）に出ようと思つて、息子の簑蟲に云ひました。

「これ倅や、私は今度行脚に出たいと思ふのだが、お前も大分大きくなつたから、一人で留守居をして居ておくれ、別に喰べるものにも不自由もしまいし、お隣りの樫の木にも親類の小母さんも居るしするから、さう淋しいことも無いだらう、だが、あまり遠くへ行つて行つて、人間にいぢめられたり、悪い鳥共に捉つて喰べられないやうに氣を付けなさい。私は、この梅の木にすつかり花が開いて、それが散つて、青い葉が出る頃迄には、きつと茲へ戻つてくるからね」

そして、父親は昔、芭蕉の翁が旅に出たやうな佗しい姿で遠い行脚に出て行きました。後に殘

された子供の簑蟲は、別に淋しいとも思はず、枝から枝へ這ひ渡つたり、口から糸を出して吊さがつて、鞦韆のやうな眞似をしたり、隣りの樫の木にゐる蟷の小母さんを訪ねたりして日を送つてゐました。父親から、木の枯葉に書いた便りが時々届きました、それには、いつも俳句が書いてありましたが、子供には何だかさつぱり解りませんでしたから、讀むか讀まぬうちに、惡戯つ兒の風に拋つてやつてしまひました。さうしてゐるうちに、だん〳〵生活に飽きてしまひました。(お父さんに連れて行つて貰へばよかつた)と思ひましたが、もうそれも後の祭りで仕方がありません。もつと遠くへ行つたら、何か面白い事がありさうに思へてなりませんでした。それは、人間の子供達が、毎日、下へやつて來ては、面白さうな遊戯をしたり、唱歌を唱つたり、おまゝごとや學校ごつこをするのを見てゐたからでもあります。

で、どうかして自分も、人間の仲間入りをして、もつと面白可笑しく暮らしたいと思つたのでした。で、或る日、子供簑蟲はとう〳〵輕い簑をひつかけたまゝ、梅の木を下りて、そろそろと人間の住居のある方へ、土の上を這つて行きました。

「あら、こんな蟲が這つてゐるわ」

「これ、簑蟲つてのよ、わたし、良いことを知つてるわ、お部屋へ持つて行きませう」

子供簑蟲は溫い指の間に抓まれてしまひました。そして、少しすると、急に、明るく、冷たく感じました。それは、自分がすつかり丸裸にされて眞赤な細い艶のある糸の屑の中にころがされてゐるのでした。急に寒くなつたので、驚いて自分の簑を探しましたけれども、もう簑はどこにも見つかりませんでしたから、子供簑蟲は泣く〳〵その糸をたんねんに綴り合せて、簑を作り始めました。一生懸命になつて作つてゐるうちに、とう〳〵立派な簑が出來上りました。それは恰度人間の、大僧正様が着られる、緋の法衣のやうな美しい簑でした。それを着た時には、如何にも着心地がよくて、ほんとうに幸福の様に思はれました。首を伸ばしたり、縮めたりして、自分の姿を見ましたが、之までとは違つて、ほんとうに美しいものでした。人間のお嬢さん方の着てゐる絹の着物と少しも違ひませんでした。それを着て這ひ始めましたが、少し這ふと、すぐと白い壁のやうな物にぶつかつて終ひました。(之は變だな)と思ひました。が、すぐに、其はもう出る事の出來ない箱といふ牢屋の中に入れられたのだ、といふことが解りました。子供簑蟲はもうほんとうに悲しくなつて終つて、泣けるだけ泣きました。しかし、人間には簑蟲が泣いてゐるこ

とは解りませんでしたから、人間が見てゐたとしたら、簑蟲が喜んでゐるとばつかり思つたことでせう。

それから子供簑蟲は、あつちへいつたり、こつちへいつたり、いつまでも這ひつゞけてゐるうちに、疲れて寢ころんで終ひました。すると、邊りが眞闇になつてしまひました。それは箱に蓋をされてしまつたのでありました。

それから、永い時間が經ちました、簑蟲は暗い函の中で泣いて〳〵暮らしました。何も喰べることが出來ませんでしたから、お腹がペコペコに空いて終ひました。

どしん、と大きな音がして、急にぐら〳〵と眩暈がしました、子供簑蟲は、とう〳〵氣絶して終ひました。それは、人間のお嬢さんが、箱から簑蟲を地面の上へ抛りつけたのでした。

「おい、お前は、どうしたといふんだ、しつかりしなくてはいけないよ」

「あ、お父さんですか、私は、どうしたんでせう、そしてこゝはどこなのですか」

子供簑蟲はお父さんに介抱されてゐました。父親簑蟲は、行脚姿のまゝでした。

「こゝは、お家のすぐ下だよ、お前はどうしてこんな簑なんか着て寢てゐたのだ」

子供簑蟲は、今迄にあつたことをすつかりお話しました。父親簑蟲は、子供のその絹の簑を脱がせて、そこらに散らばつてゐる小枝や枯葉を集めて、手早く小簑を作つて、子供に着せてやりました。そして、二匹は元の梅の枝に這ひ上つてお家に歸りました。それから、毎日毎日、父親簑蟲は、行脚の行く先々での面白いお話をして聞かせました。それから、きまつてつけ加へて云ひました。

「簑蟲の簑はいつでも、かういふのでいゝのだよ、美しい簑を着たら反つて苦しまねばならないよ」

子供簑蟲は、早く大人になつてお父さんのやうに、簑蟲の簑の儘で行脚に出たいと思ふやうになりました。（たはり）

（昭和五年四月）

後記

□此句集は私の第五句集に當る。昭和七年以降の作を輯めたものである。題して『散文時代』といふ、實に漠然とした題である。「俳句を散文的に表現した時代」といふのか、また「生活に詩がなく散文的であつた時代」といふのか――そのいづれであつてもよく、又、双方であつてもいいと自分では思つてゐる。

□俳句の散文的表現といふことに關しては、持論があるから、少し長いエッセイを書いて此句集の序の代りに添へたかつたが、恰度、身邊に種々の事情が錯綜して間に合はなかつたから、其は他の機會に讓ることとした。たゞ、私がこの三年間、わざ〳〵この冗長と見える手法を用ゐてゐたといふことは、單に流行とか物數寄ではなく、自由律俳句と他の詩との、俳句と散文とのヂャンルの問題に關心をもつて敢てしてゐたことを認めて頂きたいのである。私は其爲に或ひは必要以上の勞力を空費して來たと考へぬでもないから、今後

は急角度の轉向をしないともいへないのである。その意味に於て、此の一卷の句集をまとめておくことも萬更徒爾でないとも思ふ。

□昭和七年から昭和十年、この間は私にとつて實に平凡な時代であつた。生活はすべて隋力であつたともいへる。長女はずつと患ひとほした、其他、家庭に病難が續いたりした。又、舊い友人を續々と喪つた。綠石、裸木、龍眠、紅珠玉、せい女、等々の諸氏。私も齡不惑に入つて淋しい限りである。

□此句集中に輯めた作はまづ全作中の七八割かと思ふ。もつと選鈔した方がよい譯であるが、備忘的な家集としたかつたので、敢て凡作をも殘しておいた。附錄の文章はほんとうの附錄として讀んでいたゞければ幸である。私の横顔がわかるやうなものを少々輯めたにすぎない。

□此句集を上梓するに當つて、多數、友人諸子の御支援を得たことを深く肝銘する次第である。

昭和十年九月

武　二

目次

昭和十年（一）
昭和九年（一五）
昭和八年（三三）
昭和七年（五三）
附錄
職業（四四）
せい女とINKSTAND（六六）
いはなし（七三）
外祖父（七四）
迂遠な紹介狀（七六）
屋陋漫談（七九）
花と私（八一）
簑蟲の親子（八三）
後記（八八）

大象社出版書目

□小澤武二句集　不滅の愛（絶版）
□同　惱みの花を開く（絶版）
□同　繪の消えた繪馬（絶版）
□同　花と繪馬と氣球（絶版）
□栗林一石路句集　シャッと雜草（絶版）
□內藤寸栗子句集　私の空間（絶版）
□內田創平句集　白い海白い空（價四十錢）
□木村綠平句集　雀のゐる窓（價六十錢）
□里見波哉句集　すみ田（價八十錢）
□尾崎放哉書簡句集　好日集（絶版）

句集

散文時代

昭和十年十月五日印刷
昭和十年十月十日發行

【定價五拾錢】

著作兼發行人　小澤武二

印刷人　東京市芝區田村町四丁目四ノ一八　小野善次郎

發行所　東京市麻布區新堀町三　大象社　振替東京六八〇八一番

發賣所　層雲社

終